二〇二四年度

普連土学園中学校　入学試験問題

二〇二四年　二月一日実施

国　語

一日午前四科

一、問題に答える時間は六十分です。
二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

日本ではよく、「若者はもっと個性を発揮すべきだ」とか、「個性を磨くべきだ」などと言われます。けれど①私は、そういう言葉にはあまり意味がないと思っています。

また、日本では「個性」という言葉が主に人の外観に関して使われることにも、私は違和感を持っています。［ａ］、「個性的なファッション、個性的なヘアスタイル」は、「人がアッと驚くような奇抜なスタイル」であることが多いでしょう。

あるいは、他の誰も持っていないような特殊なスキルを持つことが個性的であることの条件のように受け取られていますね。

このように考えると、「個性＝人より目立つこと」と、多くの人が錯覚しているのではないかと思います。でも、根本的なことを言ってしまえば、この世に生まれた人間は一人残らず全員、それぞれの個性を持っています。だから、誰かに「磨きなさい」と命令されて、義務のように磨く必要などないのです。

あなたが生まれ持った個性は、明らかにあなただけのものです。世界中に、あなたと同じ個性を持つ人など誰一人としていないのですから、「他の人はどうかな？」とキョロキョロすることは不必要だし、他人の真似をする必要もありません。真似しようとしても真似できないのが、個性というものなのです。

あなた自身が「楽しい、面白い、不思議だ、ワクワクする、どきどきする」と感じ、心から求めているものを優先すれば、それでいいのです。「磨く」とか「発揮する」などと意識しなくても、自分が本当に好きなもの、興味があることに気持ちが向かっていけば、自分の世界がどんどん広がっていく。それが本当の意味で「個性を磨く」ということです。

いちばん良くないのは、親や先生の顔色をうかがったり、友達の反応を気にしたり、世間の思惑に振り回されたりしながら、「個性を磨かなきゃいけない」と無理をすることです。

そのうちに自分の軸足をどこに置いていいかわからなくなり、自分力が失われ、結局は自分で自分の個性をつぶしてしまうことになりかねません。②そういうネガティブなサイクルに入らないよう、気をつけてください。

みなさんは、「アイデンティティ(identity)」という言葉をご存知ですね？　英和辞典には、「同一性、身元、正体」などと出ていると思います。

この言葉は、心理学では「自我同一性」と訳されています。一般的な言い方をすれば、「自分のことを、他の誰でもない自分だと認識すること」という意味で、「自己認識」とか「独自性」などと言われることもあります。

たとえば、クラスの中にあなたと同姓同名の人がいるとします。当然のことですが、その人とあなたとは別々の人格を持つ別々の人間です。同姓同名の人が何人いようとも、あなたという「個」は一人しかいません。

このように、「自分と完全に同じ人間はいない。自分は、この世にたった一人の存在だ」と認識する時の基礎になるのが、アイデンティティという概念です。

これまでに私が何度も述べてきた「自分の宇宙を持って生きる」ということは、言いかえれば、「アイデンティティを見極め、確立する」ということです。

アイデンティティの確立というと、すごくハードルが高いことのように思うかもしれませんが、決して難しいことではありません。それは、「自分の頭でものを考えることが、いつでも、どこでもできる」ということなのです。

たとえば、今日あなたが学校帰りに飲んだドリンクも、図書館で借りてきた小説も、自分で決断して選んだのだから、あなたのアイデンティティの一部です。

休日の過ごし方、家族との関わり合い方、友人との付き合い方なども、すべて自分のアイデンティティを形成する要素です。

③そう考えれば、アイデンティティの見極めや確立が特別に難しいことではないとわかるでしょう。

ヨーロッパの教育現場では、「個性を発揮しろ」とか「個性を磨け」とかといって*発破をかけることはあまりありません。哲学の授業でも、国語（英語やフランス語などその国の母国語）の授業でも、あるいは歴史の授業でも、先生が生徒に期待するのは、それぞれの考え方であり意見です。あまりにも突拍子もない意見や考え方については、先生は修正しますが、自分の意見や考えを述べることができない生徒には高い評価はつきません。一人の生徒の意見や考え方に対して、別の生徒からあえて反対の意見や考え方を表明させて、両者の間でディベートさせることもあります。こうして小さい時から鍛えら

れたヨーロッパ人達にとっての課題は、チームワークをとることが不得手ということです。④日本とはあべこべという感じです。

私が小学生の頃の同級生に、足の速いY君という子がいました。

Y君は毎年、運動会の一〇〇メートル競走で一等になり、賞品のノートや鉛筆を山ほどもらっていました。私も足は速い方でしたが、このY君にはかなわなくて、運動会のたびに、「いいなあ、すごいなあ」と思っていました。

賞品のノートや鉛筆がほしかったわけでも、自分より足の速いY君にジェラシーを感じていたわけでもありません。俊足のY君のことを心から尊敬していたのです。

このように競争をとおして相手に対する尊敬の念をはぐくむことは、とても大事なことだと思うのですが、最近の日本では、「子供達に競争させるのはかわいそう」「勝ち負けにこだわるのは良くない」「順位によって差をつけるのは平等主義に反する」といった理由から、運動会で一位、二位、三位の表彰をやらなくなった学校もあるようです。

でも、競争は本当にいけないことでしょうか。

日本人なら誰でも、オリンピックで日本の選手が優勝すれば大喜びし、サッカーのワールドカップで日本チームが敗退すれば悔しがるでしょう。⑤そうやって競争を楽しんでいるわけです。それなのに、⑥学校の運動会に関しては「平等主義に反する」という理由で競争をさせないというのは、どこかおかしいと思いませんか？

私は、「競争のないところに進歩はない」と考えています。私の言う競争とは、足の引っ張り合いやルール違反のない、フェアな競争のことです。

「切磋琢磨（仲間同士が互いに励まし合い、競い合って向上をはかること）」という言葉があるとおり、フェアな競争は進歩の原動力です。このことは勉強やスポーツだけでなく、芸術、科学技術、ビジネス、産業、経済についても同じようにあてはまります。

[b]、平等主義がそんなに素晴らしいのなら、何よりも先に偏差値重視の受験戦争をなくすべきでしょう。仮に「勉強以外の競争は悪」なのだとしたら、スポーツの試合も、音楽や書道や絵のコンクールも、弁論大会も、すべてその存在意義すらなくなってしまいます。

それに、⑦学校生活から勉強以外の競争がなくなれば、ほとんどの生徒は自分に自信を持つきっかけを失ってしまうでしょう。

たとえば、あなたのまわりには、絵がクロウトはだしの子、音感が抜群な子、スポーツ万能な子、大人もかなわないほど字が上手な子など、何かに秀でた友達がいると思います。あなた自身がそうかもしれません。

そういう人達は、たとえ勉強ができなくても、体育祭で英雄に変身したり、美術の授業でスターになったりすることで、「自分には才能が備わっている」という実感を持つことができます。そして、そういった評価を受けることによって自信をつけるのです。

こうして、努力して人から認められる喜びを味わえるだけでなく、「もうちょっと勉強も頑張ってみようかな」と、苦手分野を克服しようとする意欲を高めていくこともできるのです。

他の人と比べて、絵がうまい、音感がいい、スポーツ万能、字が上手……といったことは、どれも一つの才能であり、その人の個性です。個性に優劣はありませんが、一〇人の人にかけっこをさせれば、必ず一位から一〇位までの順位はつきますし、一〇人の人に絵を描かせれば、それぞれの作品にはおのずと違いが出てきます。その違いが個性というものです。

日本では「子供の個性を大事にすべきだ」としきりに言われますが、そのわりには、個性の違いがはっきり出るようなことを避ける傾向があります。けれどその一方で、偏差値や学歴で人に差をつけている。これこそ矛盾ではありませんか。

こんな状態で「個性を磨きなさい」と言われても、たぶんみなさんは納得できないでしょう。⑧日本の大人達は、「個性の尊重とはどういうことか」を真剣に考えなければいけないと思います。

（今北純一『自分力を高める』　岩波ジュニア新書）

〈注〉＊発破をかける……強い言葉で励ますこと。

問一　空欄 a ・ b に入ることばとして最も適当なものを次のア〜オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　あるいは　イ　そもそも　ウ　だから　エ　たとえば　オ　でも

問二　――線部①「私は、そういう言葉にはあまり意味がないと思っています」とありますが、筆者はなぜ「意味がない」と考えているのですか。説明しなさい。

問三　――線部②「そういうネガティブなサイクルに入らないよう、気をつけてください」とありますが、筆者はどのようなことに気をつけるべきだと考えているのですか。説明しなさい。

問四　――線部③「そう考えれば」とありますが、どのように考えることですか。答えなさい。

問五　――線部④「日本とはあべこべという感じです」とありますが、これはどういうことですか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる言葉を、それぞれ本文中から十字以上十五字以内で抜き出して答えなさい。

日本の教育は、[A]においては優れているが、[B]を苦手としているということ。

問六　――線部⑤「そうやって競争を楽しんでいるわけです」とありますが、私たちはどのようにして競争を楽しんでいるのですか。次のア～オから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　勝ち負けを意識して。

イ　興味のあることを優先して。

ウ　好きなチームを応援して。

エ　選手たちに敬意を表して。

オ　フェアな競争だと信じて。

問七　――線部⑥「学校の運動会に関しては『平等主義に反する』という理由で競争をさせないというのは、どこかおかしいと思いませんか？」とありますが、筆者の考える競争させることの利点として当てはまらないものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　運動会での経験がプロスポーツ選手を目指すきっかけになるところ。

イ　競争を通して相手に対する尊敬の念が育まれることがあるところ。

ウ　何かに秀でた子どもが自信を持つきっかけを得ることになるところ。

エ　苦手分野を克服しようとする意欲が高まることにつながるところ。

オ　フェアな競争のもと切磋琢磨していくことで進歩が生まれるところ。

問八　――線部⑦「学校生活から勉強以外の競争がなくなれば、ほとんどの生徒は自分に自信を持つきっかけを失ってしまうでしょう」とありますが、学校生活に「勉強以外の競争」があることで、子どもが「自分に自信を持つ」ことができるようになるのはどうしてですか。説明しなさい。

問九　――線部⑧「日本の大人達は、『個性の尊重とはどういうことか』を真剣に考えなければいけないと思います」とありますが、日本において「個性の尊重とはどういうことか」について考えられていないと筆者が言うのはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　「個性」に違いがあることは間違いのない事実であるのに、あたかも「何か特別なことをしなければ個性的ではない」という風潮が世の中に広まっており、誰も本質をみつめていない状態にあるから。

イ　「個性」のことを外観のこととしてとらえることが多いわりには、本当の「個性」といえる偏差値や学歴のことに関しては画一的な方法で人を評価するという本末転倒な状態にあるから。

ウ　そもそも「個性を磨きなさい」という言葉には矛盾があり、到底納得できることではないのに、それでも大人たちは子どもたちに個性を磨くことを強制する状態であるから。

エ　偏差値や学歴以外の個性の違いが出ることは避ける傾向がある一方で、「子供の個性を大事にすべきだ」としきりに言われるというような、ねじれた状態にあるから。

オ　他の人と比べてみれば誰でも何か特別な才能があるはずなのに、その才能を伸ばそうとしないで、「個性に優劣はない」とあえて個性の違いを避けて平等に評価しようとする、おかしな状態にあるから。

問題二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

ちょっとした失敗から一時期友達に仲間外れにされていた「わたし」は、強い思いを持って競馬の実況者を目指す従姉妹の「実況者になっちゃえばいい」というアドバイスを受ける。その従姉妹にもらった双眼鏡をお守りとして持ち歩き、アドバイスにしたがって学校生活を〝脳内実況〟するようになり、つらい時期を乗り越えることができた「わたし」は、ある出来事をきっかけに生け花部に入り、学園祭の演目として〝生け花ショー〟を提案した。

生け花ショーのアイディアは、その日の部活でみんなに紹介された。野山先生はおもしろそうだねと目を輝かせた。

「ショーをするなら中庭ステージだね」

「中庭ステージ？」

「東校舎と西校舎に挟まれた中庭があるでしょ？　文化祭の日には、あそこに特設ステージが組み立てられるんだ」

一年生はまだ知らないよね、と野山先生は微笑んだ。

「まず企画書を作って、二学期になったらすぐ郷本先生に渡そう。ＯＫが出れば実現するよ」

「郷本先生!?」

それって閻魔大王じゃん！　思わずきき返すと、野山先生がつけ加えた。

「郷本先生が文化祭の責任者なんだ」

わたしの頭のなかだけにあったアイディアが閻魔大王に認められるかな。期待も戸惑いも混ざり合ってマーブル模様だ。

「ショーなんてちょっと楽しそう。どんな髪型で出ようかなー」

今日はハーフアップにしているカオ先輩もほめてくれた。

「カオ先輩のおかげで思いついたんです」

「え、何それ？」

不思議そうにしているカオ先輩に、「気にしないでください」とわたしは手を振った。

そして、わたしはカオ先輩から、今日まだ一度も口を開いていない人物に目を移した。

九島さん。
賛成に手を上げてくれたけど、本心は分からない。
実況をするために必要なこと。それはまずその人を知ることだ。

「ねえ、九島さん、夏休みどこか遊びに行かない？」
その日の帰り道、わたしの急な誘いに、九島さんは目を丸くした。
無理もない。今まで二人で帰ったこともなかったんだもん。今日、九島さんに一緒に帰ろうと初めて声をかけた。
実況のためには、九島さんの取材も必要だから。
「わたし、明後日から日本にいないから……」
「海外旅行？　いいなあ、わたしなんて外国行ったことないよ。どこ行くの？」
「……ベトナム」
「へえ、ベトナムって暑そうだね。日本も超暑いけど。ベトナムで何するの？」
「……おばあちゃんの家に行くの」
「えっ、九島さんのおばあちゃんってベトナム人なの？」
「……お母さんも」
「九島さん、ハーフだったの!?　知らなかった」
「……特に、誰にも言ってないから」
『驚きの事実がここに判明です。今［ a ］見つめてみると……。
わたしより小柄でボブヘア。濃いまつ毛で黒い瞳。ひかえめな鼻。肌はやや白めです。
たとえ目の前で生春巻きを食べていてもベトナム人とのハーフだと気づかなかったでしょう』
「九島さんって、下の名前何だっけ」
『わーバカ！　綿野あみ、痛恨のミス！
同じ部活なのにフルネームも覚えてないなんて、しかもそれを本人にきいちゃうなんて……大、失、敗』

「麻衣。九島麻衣」
「へえ、日本の名前なんだね」
九島さんがふつうの調子で答えてくれたことに胸をなで下ろす。
「マイは、ベトナムの花の名前なの。テトのころに咲く黄色い花」
「テトって？」
「旧正月のこと……」
わたしはどこかで聞いた記憶を手繰り寄せる。旧正月は、確か一月後半とか二月くらいにある、昔の暦のお正月だ。
「そうなんだ。明後日からベトナムなら、明日遊ぼうよ。どこか行きたい場所ある？　この駅の近くのショッピングモールとか、ゲーセンとか」
「…………」
①<u>難しい顔で黙り込んでしまった</u>。
「あー、ごめん。旅行の準備とかあるよね、明日なんて急だったかな」
あきらめかけたわたしは、あることをふっと思いついた。七夕の準備のときのこと。
ダメもとできいてみよう！
「九島さん、カラオケは？」
その単語を聞いて、九島さんの表情がぱっと変わった。
「……行く」
「うん、行こう行こう、カラオケ」
『やった！
取材の約束、成功です。
九島麻衣、やっぱりカラオケ好きでした。
さあ、ここで連絡先交換と思いきや？　おっと、九島さんスマホを持っていませんでした。
イエ電の番号をメモしてくれている九島さん。当日はどんな歌を聴かせてくれるのでしょう』

もちろん実況のための情報収集なんだけど、何だかわたしは九島さんのことをもっと知りたくなってきていた。

「いえぇーいっ！」

『こちらカラオケポンポンの三〇八号室です！　ご覧ください、②<u>信じられない光景</u>が目の前に広がっています。

ベトナム生まれのヤマトナデシコ九島麻衣、ソファの上で熱唱です。

その隣（となり）、楽し気にマラカスを振っているのは、何と九島さんのお母さんですっ。

まさかまさかお母さんがついてくるとは！　中一だけのカラオケが、よっぽど心配だったのでしょうか』

途中（とちゅう）、九島さんがトイレに席を立ったとき、

蛍光塗料（けいこうとりょう）が光る部屋で、九島さんのお母さんがふと真顔になった。

「③<u>あみちゃん、ありがとうね</u>」

「何がですか？」

「麻衣は小学校に上がるまで、父親の仕事でベトナムに住んでたの。私たち両親とおばあちゃんの四人で。麻衣はおばあちゃん子だから、日本語よりベトナム語のほうが得意だった。日本の学校に入ったとき、日本語がなまってるっていじめられて、小学校ではほとんどしゃべらなかったの。だから、中学でお友達ができてよかった」

大学時代、日本に留学していたというお母さんは、なめらかな日本語でそう言った。

「今日一緒に来たのは、お礼が言いたかったの。麻衣と友達になってくれてありがとう。これからもよろしくね」

「いや、そんな……」

『綿野あみ、お礼を言われるようなことはしていません。

実況の取材で誘（さそ）っただけなのに。純粋（じゅんすい）な友達じゃない。④<u>ほんのりとした後ろめたさを感じます……</u>』

カラオケを出た後、「二人で甘（あま）いものでも食べていったら」と九島さんのお母さんがくれたおこづかいで、ドーナツショップに入った。

「九島さんってほんとに歌がうまいね！　ビックリした」

「ううん、そんなことない。歌うの好きなだけだよ。お母さんまで一緒に来ちゃってすごく恥ずかしい」

『九島さん、自分で気づいているでしょうか。学校ではほとんど単語しか話さなかったのに、カラオケから出てきた九島さんは、ふつうに話してくれてます』

「そんなに歌がうまいなら合唱部とか軽音楽部でもやっていけそう。どうして生け花部に入ったの？」

取材を兼ねてきいてみると、

「………」

う、沈黙。何か別の質問にしなきゃと焦っていると、九島さんが小さな声で答えた。

「⑤……しゃべらなくてすむから」

九島さんは目を伏せたまま、ジュースのストローの袋を小さく折りたたみながら言った。

ああ、そうか。九島さんのお母さんの言葉が耳元で蘇った。

「九島さん、全然なまってないよ。小学校のころはどうだったか分からないけど、今しゃべってる発音は全然変じゃない」

本心だった。九島さん本人がなまっていると感じるならきっと気のせいだ。

「……ほんと？」

「ほんと！」

わたしは気づかないうちに前のめりになっていた。もう実況のためだけじゃない。

「もっと聞かせて。マイちゃんの話。もっと知りたい」

思わず名前で呼んでしまった。何だか熱すぎて引かれてしまったかな。そう思っていると、テーブルにポタッとしずくが落ちた。

「……ありがとう」

目をごしごしとこすりながら、マイちゃんがつぶやいた。

「綿野さんたちが話してるの、楽しそうだなって思ってた。でも勇気なくて。……ほんとは、わたしもしゃべりたかった」

涙目で微笑むマイちゃんは、水が上がった花みたいにうるおって見えた。

ただの大人しい子だと思ってた。包み隠さず言えば、ただの暗い子だと思ってた。

カオ先輩とばっかりしゃべっていたわたしは、マイちゃんが黙っている理由なんて考えたことがなかった。
ごめん。マイちゃん。
⑥<u>「ただの」の一言で片づけられる人なんていないのかもしれない。</u>

…… 中略 ……

「じゃあ、試しにやってみる？」
野山先生は花の入ったバケツに目をやった。そこには、骨折したわたしの花が余っている。
「そうですね。ショーのイメージをつかんでおきたいです。なんせ入賞を目指すんですから」
城部長が立ち上がり、ちゃちゃっと準備を進める。
「この机をステージとして、実況席は……」
「実況もやるんですかっ？」
「当然ですよ、綿野さん」
『や、ば、い！
気分はノー勉強でテストに臨む朝。ここにはカンペもありません。
これはもう、降参するしかありません！』
「あ、あの、言い出しっぺで何ですけど、わたし人前で実況したことないんです。いつも頭のなかで、教室の様子とか実況するのが好きなだけなんです。生け花も今まで脳内実況してただけで……。だから今日いきなりっていうのはちょっと……ごめんなさい」
「へえ、脳内実況？　いいじゃん、それ聞かせてよ」
「え？」
「あたしたちは聞いてないと思って、脳内実況のつもりでやってみれば？」
……脳内実況で、いいの？
自分の部屋で脳内実況を声に出すと思えばいいのかな。
⑦<u>カオ先輩の言葉に、すっと肩の重荷が下りた気がした。</u>

「あみちゃん、一緒にやってみよう？」
マイちゃんがわたしのシャツの脇腹あたりをチョンとつまむ。
まっすぐな瞳で見つめられて、コトッと気持ちが動いた。
一番緊張するのは、生け花を披露するマイちゃんのはず。
わたしの役目は……応援すること。
やってみる。
わたしは実況席に着き、マイク代わりに左手のこぶしを握った。
「口を開けば、ほのかに残る蓮の実の味。
みなさん、こんにちは。ハジメテヒラク一回目の練習です。披露してくれるのは、生け花部の一年生、九島麻衣ちゃん。
実況は同じく一年生の綿野あみ。一年生コンビでお送りします」
「では行きますよ、スタート」
城部長が腕時計でカウントする。
「始まりました！
今日の花材はユキヤナギとリンドウ。
挑戦するのは、創作花です。
マイちゃん、まずは枝をじっと眺めます。
枝は生もの。見る方向によって、その表情が変わります。
あ、それって……人と同じかもしれません。この人はこういう人って思っても、他の表情が隠れてる。決めつけることなんてできないのかも……。
今、ユキヤナギをパチンとカット！
うまい！　生け花歴はまだ四か月。それでも練習の成果が出ています！」
「二分経過、残り三分です」
「リンドウの青紫の蕾は、ろうそくの火の形。大人っぽい秋の花です。

あ、そういえば！　ベトナムにも季節の花があるそうです。旧正月に咲くマイの花。それがマイちゃんの名前の由来です。大好きなおばあちゃんが名づけてくれました」

「へえー、そうなんだあ」

カオ先輩たちの驚きが聞こえる。

「あ、添え木留めだ。そっと枝を支える添え木は、縁の下の力持ち！」

「細かな葉がサワサワと揺れるユキヤナギ。あれが腕にふれると、猫じゃらし並みにくすぐったい」

「高さのちがう二本のリンドウが寄り添います。何となく……マイちゃんとおばあちゃんをイメージするのはわたしだけでしょうか」

「タイムアップ！」

え、もう？

夢中で実況しているうちに五分が経過していた。

「完成です！　マイちゃんに大きな拍手をお願いします！」

花ばさみを置いたマイちゃんは、［b］息をついた。

「すごくいい感じだね。九島さん、五分でよくここまで生けたねえ。この調子ならハジメテヒラク、実施できそうだね」

「本当ですか？」

野山先生の言葉に、マイちゃんの頬が［c］上がる。

「そうだな、手直しするとしたら、ここの葉を……」

野山先生がアドバイスを始めると、

「綿野さん」

城部長に呼ばれた。

「はいっ」

背筋に緊張が走る。

初めて、実況を聞かせてしまった。

恥ずかしい。何か変なことも口走ったかもしれない。

お願いです、怒らないでください、仲間外れにしないでください。

「驚きました。実況のスイッチが入ると別人ですね」

「え、それって」

ほ、ほめられてる……？

「実況、おもしろかったよ。いつも頭のなかでこんなことしてるの？　もっと聞きたいって思っちゃった」

カオ先輩まで！

脳内なら誰にも嫌われずにすむと思ってたけど……。

口を開いても、声に出しても、大丈夫だった。

⑧<u>わたしの手は無意識にポケットのお守りにふれていた。</u>

「マイちゃんの名前の由来とか紹介してくれたじゃん？　あーいうの、よかったと思う。何となく、知ることができるとうれしいもん」

カオ先輩の言葉にうなずきながら、わたしは実感する。

実況のメインはもちろん生け花だけど、マイちゃんについても知ってもらえるのが何だかうれしい。

「マイちゃん、おつかれさま！　手伝うよ」

花を片づけ始めたマイちゃんに声をかけた。

「あみちゃん」

マイちゃんが微笑んだ。

「実況してもらえるのって心強いね。何ていうか、あみちゃん、守護霊みたいだった」

「守護霊って。わたし生きてるよ？」

そう笑いながら、込み上げてくる気持ちを言葉にした。

「あー、楽しかった」

マイちゃんのための応援だけど、自分も楽しんでいた。

脳内実況じゃ、味わえなかった。実況を人に聞いてもらうとこんな気持ちになれるんだ。
家庭科実習室の壁紙が貼り替えられたように、白くまぶしく見えた。

（こまつあやこ『ハジメテヒラク』　講談社）

問一　文中の空欄 [a] ～ [c] に入ることばとして最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　きゅっと　　イ　じりじりと　　ウ　ぱっと　　エ　ほうっと　　オ　まじまじと

問二　――線部①「難しい顔で黙り込んでしまった」とありますが、「九島さん」が「わたし」の誘いをすぐに受けることができず、「難しい顔で黙り込んでしまった」のはなぜですか。説明しなさい。

問三　――線部②「信じられない光景」とありますが、どのようなことが「信じられない」のですか。二つ答えなさい。

問四　――線部③「あみちゃん、ありがとうね」とありますが、「九島さんのお母さん」は、何について「ありがとう」と言っているのですか。説明しなさい。

問五　――線部④「ほんのりとした後ろめたさを感じます……」とありますが、「わたし」が「後ろめたさ」を感じたのはなぜですか。説明しなさい。

問六　――線部⑤「……しゃべらなくてすむから」とありますが、「九島さん」はなぜ「しゃべらなくてすむ」クラブを選んだのですか。説明しなさい。

問七　――線部⑥「『ただの』の一言で片づけられる人なんていないのかもしれない」とありますが、「わたし」はどうしてこのように思ったのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　今まで人の一面だけで性格を判断することに慣れていたが、「九島さん」の心情に触れることによって、人は誰でもそれぞれ表に出てこない複雑な背景があることを知ったから。

イ　「九島さん」はただおとなしいだけではなく、内に秘めた情熱的な部分があることを知って、自分の性格にも多面性があることに気付いたから。

ウ　実況するためには「ただの」の一言で言い表してしまった方がうまくいくと思っていたが、実際には「ただの」の一言を使って実況することが難しいことが分かったから。

エ　実際には「九島さん」の性格を表すために、すでに「ただの」おとなしい子、「ただの」暗い子、と一言で言い表していない事実に直面したから。

オ　深く知りもしないでおとなしい子だと決めつけていたが、「九島さん」のおとなしいだけではない面や思いを知って、自分のものの見方の単純さに思い至ったから。

問八　――線部⑦「カオ先輩の言葉に、すっと肩の重荷が下りた気がした」とありますが、「わたし」はなぜ「肩の重荷が下りた」のですか。「重荷」の内容を明らかにして説明しなさい。

問九　――線部⑧「わたしの手は無意識にポケットのお守りにふれていた」とありますが、この時の「わたし」の思いとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　行き当たりばったりで、必ずしもうまくできたとは思えない実況だったが、思いもよらず先輩たちにほめてもらえたことを、実況することを勧めてくれた従姉妹に報告したいという思い。

イ　従姉妹にアドバイスされ、脳内だけでしていた実況だったが、周りの人にも認められ、ほめられるほどになったことを従姉妹に自慢したいという思い。

ウ　従姉妹のアドバイスで始めた自分の実況が、今までと違って脳内だけの自己満足に終わらずに、周りの人にも喜んでもらえたことを知って、従姉妹に感謝したいという思い。

エ　「九島さん」と仲良くなれただけではなく、周りの人に「九島さん」のことを知ってもらうという自分の本当の目的が実現し、きっかけを作ってくれた従姉妹に喜びを伝えたいという思い。

オ　これまで脳内だけでしていた実況を初めて人に聞いてもらい、ほめてもらえはしたが、本当に喜んでもらえていないのではないかと不安に思い、従姉妹に支えてもらいたいという思い。

問題三　次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

① 幼児を対象としたドウワの読み聞かせ会が開かれた。
② エベレストのチョウジョウを目指す登山家。
③ 父のコキョウに里帰りする。
④ チュウジツに再現された模型。
⑤ 百年休まずに時をキザむ時計。
⑥ 面倒(どう)な役割も快く引き受ける。
⑦ 月の引力が潮の満ち引きに影響(えいきょう)を与(あた)えている。
⑧ 危険物質を除去する。
⑨ 公園を縦横無尽(じん)にかけ回る。
⑩ 粉雪が静かに舞(ま)う。

問題四

日本語には、単語の前や後にことばを加えることで、ニュアンスや状態を詳（くわ）しく説明できる「接頭語」「接尾（び）語」というものがあります。「接頭語」「接尾語」に関する以下の問いに答えなさい。

問一　次の①～⑤の単語の前に加えられる接頭語を後の語群から選んで、下の説明文に合う言葉を作り、すべてひらがなで答えなさい。

（例）むずかしい（難しい）　【「わずかに、少しだけ」の意味を加える】
　「こ」＋「むずかしい」　→　（答え）こむずかしい

①　こころ（心）　【「本当の」「完全な」の意味を加える】

②　そこ（底）　【ものごとを強調する】

③　ふとい（太い）　【「並でない」の意味を加える】

④　ほそい（細い）　【程度や状態を強める】

⑤　かぞく（家族）　【尊敬の気持ちを加える】

〈語群〉　お　か　ご　ず　ど　どん　ま

問二　次の①〜⑤の単語の後ろに加えられる接尾語を後の語群から選んで、下の説明文に合う言葉を作り、すべてひらがなで答えなさい。

（例）さむい（寒い）　【その状態が広がっている様子を表す】

「さむい」＋「さ」　→　（答え）さむさ

① うまい（美味い）　【そのような状態があることを表す】

② かなしい（悲しい）　【そのような印象を与(あた)える様子を表す】

③ やすい（安い）　【そのような状態に見えることを表す】

④ かたい（固い）　【そのような傾(けい)向にあることを表す】

⑤ こわい（怖い）　【そのような気持ちになる心の動きを表す】

〈語群〉　がる　け　げ　ぽい　み　め　めく

問題五

漢和辞典（漢字辞典）を使って漢字を調べる方法の一つとして、部首索引を活用する方法があります。まずは部首索引から調べたい漢字の部首を探し、その部首が載っているページを開きます。そして、部首の項目ごとに部首を除いた画数の少ない順に漢字が並んでおり、それをもとに調べたい漢字を探します。

このことを踏まえ、次の①～⑤の漢字について、部首名と、それを除いた画数とをそれぞれ答えなさい。なお、部首名はひらがなで、それを除いた画数は漢数字で答えること。

（例）防　→　（答え）こざとへん・四画

①　窓

②　落

③　臓

④　穀

⑤　庭

（以下余白）